

総合調査と野外調査

式 正 英

多分最近旅行したしたものだと思うが、「総合調査」という名前で、土地の風土に関する基礎的調査によくひっぱり出される。これは地域の共同調査とは少し異なり、一つの目的を持った専門的調査なのだが、土地の持つ複雑性を類縁科学に協力をもとめて明確にしようとするものといえよう。それ故調査メンバーは兩極の調査が地球物理学を中心として調査隊を組織するように、ある専門が中核となって送られる。私の関与しているものでは建設省の都市地盤調査と農林省の土地利用高度化調査とがある。前者は工場など重量構造物の立地に関する適性を、予じめその可能性のある臨海部の低地の地盤条件にしぼって調査しておこうとするもので、建築基礎構造、地震工学、土地質学、土質力学、地形学の関係者がそれぞれ独自の調査方法によって地盤調査を分担する。問題が単純ではっきりしているから、各専門の協力分野は自ずとわかれて相犯すことがない。地形学の場合だと空中写真判読による微地形調査と低地の地形発達史を応用解釈して、等質地盤の拡がりをおさえることが役割である。つまり地理の側として果す分野は、

このように端的に技術的にしぼられた場合でも分佈、拡がり、平面図表現に本質があつて、この点他の分野はいずれも面積的な問題を解決する理論を持ち合わせていない。

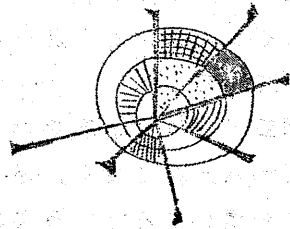
地理分野のもう一つの強味はこのような総合調査の場合でもやはりフィールド・サーヴェーのときに発揮される。机上での論客は現地に出ると得てして借りて来た猫のおし黙つてしまいがちである。現地の可視的な事物から問題を探し出し、役立つような資料を抽出する野外観察の仕事はそれ自身テクニクとして重要不可欠なものである。しばしば総合調査のときには各専門家が合同でジープやバスに便乗して野外に出かけることになる。野外に出れば位階勲等をふりあげてみた所で、広い大きな自然の前には人間は却つてみじめな存在になるばかりのことである。海上ホーリングの場所へ伝馬船をやとつて落外に出ると途端に捲浪を船腹に喰つて、船上の先生はザンブリとしぶきをあびて塩水で仲良くビンヨ濡れになってしまうようなことさえもある。こんな経験がくり返されると専門によつて孤立しあいがちの調査者同志を次第に心かほぐれて互いに親近感を覚えるようになり、自然に他の専門の話にも耳を傾ける余裕も出てくる順序になる。このようなとき、例え

ば濃尾平野の赤富の池沼の所で金魚養殖の話をして、韃中集落の話をして
も不思議なことに話題を提供するのはこちらばかりなことが多い。大学の学
部内の編成も言ってみれば総合調査の組織のような一面もあるが、教授会の
議論は袴を着ているから、胸襟を開くという感じからは程遠いものである。
だから総合調査に伴う合同野外調査の価値は実際的な成果をもたらすことの
他に調査者同志の人間関係について安全弁の役をも果たし、その意味では調査
全体に貢献している役割は非常に大きく根本的とも云える。

他の専門家達と一緒に歩くことの利点は勿論いうまでもないことだが、未
知のことを教わり、同じ事物でも観察の仕方の異いを知ることで卑益される
面は頗る多い。昨年の秋には農林省の依頼で草地農業の人達と土地のもつ生
産力を分級する方法論を検討するために、西富士や兩旁嶽を歩いた。富士の
裾野と言えは、学生時代野外教練で汗臭い訓練を受けた経験もあり、未だに
演習地問題で騒がしいところであるが、今の西富士は軍施設の廃墟が散点し
ていてもイタリアンライ・ペレニアルライ・ラディノクローバ・レッドクロー
バ・オーチャード等の牧草が緑なす^{しね}緑となって抜かり平和な開拓地がひら
けている。しかし風景の癒和さに反し水濁のもとめにくいことから水源調査
の苦勞話を前に聞いており、結局本栖湖の水は水利権がからまつてひけず、
やっと天守山地の支沢から取水して裾野を鉢巻型にめぐる一昨年完成したと
いう水直管を実際に見てその径の細さに感嘆を禁じ得なかつた。この開拓
地は専業路農家に特色がありジャージ一種を平均三畝持つてはいるが、開拓
後十余年経つた現在でも暮し向きはさ程楽でもなさそうである。豊もない採
れた板蕨りの開拓農家の中で鍋に煮たドロドロと濃い黄色い牛乳をいただき
窓外には土地が固いために枝わかれした大根の干したのを見ると、富士山が
背景になればどこか大陸にでも来ているような錯覚さえ覚える。自然の苛
烈さは10年の人間の努力には大して報いを与えていないようでもあるが、
長野県人の多い開拓者達のねばり強さには一向にへこたれたようすは見られ
なかつた。この火山性の扇状地には火山灰砂礫が二次的に堆積して表層部
に固結した盤石を形成している。カナマサとかチャンキリマサとか呼ばれる
特殊土壌でチャン(父親)がツルハンで碎かなければ耕作できない程だとい
うのである。西富士ではこの他アカマサ、エカスマサと呼ぶ土壌が分布する
が、土地生産力の調査は土壌と地形、地形と植生、土壌と植生に関して行わ
れいくつかの成果をあげた。天守山麓の小扇状地はス、キ、熔岩の斜面は根
笹が自然的にそれぞれすみ分けていたし、腐植層の厚さは草ののびに密接な
関係を持ち牧草の反当り収量にすると2倍も3倍も開いてくる。これらのこ

とは知った後では当然のようでもあるが、現地で短時日の内にすることは容易でないとい一人で歩いて得られる内容でもない。この時は引きつづいて兩東麓にまわり4年生の古田君と岡本君と落合つて黄瀬川や愛鷹の山麓を歩いて卒論のフィールド指導に従った。西富士では茲く堆積していたアカマサやエカスマサが兩東麓の愛鷹山麓では火山灰堆積の方向性のために、夫々西富士の10倍も厚く堆積していた。マサの見分け方が愛鷹でも容易にできたのはその前日までの総合調査の野外調査のおかげであり、これが両君の卒業論文に生かされていれば、正に総合調査の功徳は果しない。(Jan. 29, 1961)

山 び こ



調査雑感

川井 玲子

昨年9月末から1ヶ月群馬県の土地利用調査に出張した。入所した年に監査室から物言いがついて名古屋行きが前日に取消されて以来、千葉や東京の調査に出してもらったことがあってもひとの名を借りないでこんなに遠くに出たのははじめてである。近頃は土地利用が卒論の必修となつていて、図は既に御存知のことと思うが、土地利用調査というのは見た通りで頭を使わず誰にでもできる代り75項目40種類もの区分を長さ面積の基準に合わせて採用しなければならず神経の疲れるものである。空中写真を唯一の武器とするが、調査地域が運悪く公私どこの機関によつても撮影されていないとなると、十数年前米軍が撮つた1/4万写真を使わなければならないはめになる。たとえ新しい大縮尺の写真が手に入つても、こゝ高崎～太田のような良好な二毛田地域では2月撮影のものでは色調からは水田と畑の判別さえつきにくく、地割を頼ることになるが、ここ2,3年急激にふえた陸田ともなるともう一筆調査をまつより他はない。ここはまた名だたる養蚕地域として、徹高地には桑園と普通畑が半々、七分三分と交錯し、根刈り仕立てで葉を落し束ねた状態にある冬の写真では両者の判別は全く難しい。

1/5万分の1の精度と1ヶ月間に半図葉というノルマを考えると、一筆調査もならず、道路の交点などでサンプル調査を試みてもあるいは白くあるいは黒く写つていて全くあてにならない。桑園は其上、本畑と畦畔植、間作のあるなしを区別する規定である。堤防の上から見はるかすと一面桑畑となつ